実習前後におけるシャイネス感情と 社会的スキルの変化について

—有資格者と比較して—

*Changes in Students' Shyness and Social Skills after Practical Training:
a Comparison with Qualified Therapists*

田中 真一^{1)*} 古島 由紀²⁾ 村田 伸³⁾ 梅井 凡子⁴⁾

SHINICHI TANAKA^{1)*}, YUKI FURUSHIMA²⁾, SHIN MURATA³⁾, NAMIKO UMEI⁴⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, Shimonoseki Rehabilitation College: 3-4-17 Takesaki, Shimonoseki-City, Yamaguchi 750-0025, Japan. TEL +81 83-222-0606

*Present address: Murakami Orthopaedic Sports Clinic: 280-1 Enoura, Takatamachi, Miyama-city, Fukuoka 839-0213, Japan. TEL +81 944-22-6555 FAX +81 944-22-6699

²⁾ Department of Physical Therapy, Fukuoka Wajiro Rehabilitation College

³⁾ Physical Therapy Major, Department of Rehabilitation Sciences, Faculty of Rehabilitation Sciences, Nishikyusyu University

⁴⁾ Prefectural University of Hiroshima Faculty of Health and Welfare

Rigakuryoho Kagaku 25(3): 413-417, 2010. Submitted Nov. 25, 2009. Accepted Jan. 14, 2010.

ABSTRACT: [Purpose] The purpose of this study was to investigate the relationship between students' feelings of shyness and social skills, as well as the changes in shyness and social skills after practical training. [Subjects] The subjects were 88 students and 57 qualified physical and occupational therapists. [Method] Before and after 3 weeks of practical training, we performed surveys of the students using the trait shyness scale and KiSS-18 for social skills. We also performed the same surveys with the qualified therapists as subjects. [Results] The students showed a significant rise in the trait shyness scale after the practical training, but there was no significant change was found in their social skills. Significant correlations were found between the trait shyness scale and KiSS-18 scores among students both before and after training as well as among the qualified therapists. [Conclusion] The findings of this study were that after practical training, students' feelings of shyness increased significantly, but their social skills were unchanged. We consider that heightened feelings of shyness after the practical training was one factor behind the lack of improvement in social skills, therefore, in-school inter-personal skill education is of importance.

Key words: before and after practical training, shyness, social skills

要旨:〔目的〕本研究の目的は、学生のシャイネス感情と社会的スキルとの関連性を検討するとともに、実習前後のシャイネス感情と社会的スキルの変化を検討することである。〔対象〕学生88名、PT・OTの有資格者57名を対象とした。〔方法〕3週間の実習前後に特性シャイネス尺度と社会的スキル(KiSS-18)の調査を実施した。またPT・OTの有資格者に同様の調査を実施した。〔結果〕学生のシャイネス尺度は実習後有意に高まったが、社会的スキルには有意な変化は認められなかった。シャイネス尺度とKiSS-18の相関は、学生の実習前後、および有資格者、すべてに有意な相関が認められた。〔結語〕本研究の結果、学生の実習後において、シャイネス感情は有意に高まったが、社会的スキルに変化は認められなかった。実習において社会的スキルの向上が認められなかった原因の一つにシャイネス感情の高まりが考えられ、学内教育においても対人スキルの教育が重要であると考えられた。

キーワード: 実習前後, シャイネス, 社会的スキル

¹⁾ 下関リハビリテーション学院 理学療法学科: 山口県下関市竹崎町3丁目4-17 (〒750-0025) TEL 083-222-0606

* 現所属: 村上整形外科スポーツクリニック: 福岡県みやま市高田町江浦280-1 (〒839-0213) TEL 0944-22-6555 FAX 0944-22-6699

²⁾ 福岡和白リハビリテーション学院 理学療法学科

³⁾ 西九州大学リハビリテーション学部 リハビリテーション学科理学療法専攻 ⁴⁾ 公立学校法人県立広島大学 保健福祉学部

受付日 2009年11月25日 受理日 2010年1月14日

I. はじめに

我々、理学療法士が対象者に対して最適な治療を行うためには、医学的知識や理学療法技術の向上に努めるとともに、対象者や医療関係者との信頼関係を築くことが重要である。渡辺は、適切な理学療法を遂行するためには患者・家族とのコミュニケーションや信頼関係を構築することが最優先課題であること、また対象者や家族のみならず医療従事者間の良好なコミュニケーションが重要であることを報告しており、理学療法士は円滑な対人関係を築くための社会的スキルが求められている。相川は、社会的スキルとは対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人関係の構築能力であり、このスキルが高い人は相手の反応を的確に解釈でき、自分にとっても相手にとっても有益な対人目標を選択し、その目的達成のために具体的にどのように反応すべきかを熟知していると述べており²⁾、理学療法士にとって非常に重要なスキルと思われる。

各養成校では、社会的スキル向上のために様々な教育方法が模索されている。なかでも、臨床実習は対象者や現場のスタッフとの良好な対人関係が求められ、社会的スキルを向上させる良い機会である。しかし、臨床実習において対象者や実習指導者と円滑な人間関係を形成するうえで苦労する学生が多い。勅使河原は、実習を終了した149名を対象にアンケート調査を実施したところ、78名(52.3%)が人間関係に悩んだり、うまくいかないと感じた経験があったと報告している³⁾。相川²⁾と菅原⁴⁾は、社会的スキルが低い人は対人場面において適切な行動をとることができず、望ましい対人関係を築くことが困難であると報告している。初対面の人との会話では、「恥ずかしい」や「不安」であるという気持ちは誰もが経験する感情である。養成校内でも、このような感情が影響して友達がなかなか出来ない、教員に対して質問ができないという学生が観察される。このような感情はシャイネス感情と言われ、一般的には「内気」「はずかしがり」「引っ込み思案」「照れ屋」「はにかみ」などを指す概念として知られている⁴⁾。このような感情は誰でも経験するものであるが、特定の状況に限らず対人場面であれば常に不安を感じ、行動抑制が持続する場合をとくに特性シャイネスと呼ばれ⁴⁾、これは実習で円滑な対人関係を築くうえで影響を及ぼしている因子かもしれない。

そこで本研究では、学生のシャイネス感情と社会的スキルとの関連を検討するとともに、実習前後のシャ

イネス感情と社会的スキルの変化を比較検討した。さらに、理学療法士(以下、PT)または作業療法士(以下、OT)の有資格者に対して同様の調査を行い、有資格者と学生とを比較した。

II. 対象と方法

1. 対象

対象学生は、某医療系専門学校在学中のPT・OT学科昼間コース2年生88名(男性51名、女性37名、平均年齢 22.4 ± 4.4 歳)とした。有資格者は当学院の関連養成校と、一般病院に勤務するPTおよびOT57名(男性31名、女性26名、平均年齢 31.2 ± 6.6 歳、平均経験年数 8.9 ± 7.4 年)を対象とした。研究を開始するにあたり、対象者には研究の目的と方法を説明して同意を得た。

2. 方法

シャイネス感情は相川⁵⁾が作成した「特性シャイネス尺度(Trait Shyness Scale)」(以下、シャイネス尺度)を使用した。16項目5段階形式であり、合計点数は16点から80点までの範囲となる。また質問内容においては「私は新しい友人がすぐできる」など逆転項目においては点数を逆転して算出する。尺度の判定は、点数が高ければ特性シャイネスの傾向が強く、点数が低いとその傾向は弱いという判断で、基準点は設定されていない。これは人格特性としてのシャイネスを測定するために開発された尺度であり、高校生から一般の人まで広く応用されている(表1)。

社会的スキルの測定は、菊池⁶⁾によって作成されたKikuchi's Social Skill Scale 18項目版(以下KiSS-18)を使用した。18項目5段階形式で、18点から90点までの範囲となり、高得点ほど社会的スキルが高いと判断する。これはゴールドSTEINらが作成した初歩的なスキル、高度のスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレス処理スキル、計画のスキルの6種類の社会的スキルが含まれ、対人関係を円滑にするスキルの有無を測定する尺度であり、若年者に広く活用されているものである。

学生に対する調査は、3週間の実習前と実習後に学内で一斉調査を行い、その場で回収した。有資格者においては、協力施設に特性シャイネス尺度とKiSS-18の各調査表を配布し、記入後回収した。

統計処理は、有資格者および学生の実習前後のシャイネス尺度とKiSS-18との関連性について、それぞれピアソンの相関係数を用いて分析した。また、有資格者

表1 シャイネス尺度

みなさんが毎日の生活の中で日頃感じていることや思っていることをお尋ねします。

次の各文章は、あなたにどの程度あてはまりますか。あてはまると思うところに○をつけて下さい。

	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらとも言えない	やや当てはまる	よく当てはまる
1. 私は新しい友人がすぐできる	5	4	3	2	1
2. 私は人がいる所では気おくれしてしまう	1	2	3	4	5
3. 私は引っ込み思案である	1	2	3	4	5
4. 私は人の集まる所ではいつも、後ろのほうに引っこんでいる	1	2	3	4	5
5. 私は人と広く付き合うのが好きである	5	4	3	2	1
6. 私は他人の前では、気が散って考えがまとまらない	1	2	3	4	5
7. 私は内気である	1	2	3	4	5
8. 私は誰とでもよく話す	5	4	3	2	1
9. 私は自分から進んで友達を作ることが少ない	1	2	3	4	5
10. 私は、はにかみやである	1	2	3	4	5
11. 私は初めての場面でも、すぐにうちとけられる	5	4	3	2	1
12. 私は人前にでると気が動転してしまう	1	2	3	4	5
13. 私は自分から話し始める方である	5	4	3	2	1
14. 私は人目に立つようなことは好まない	1	2	3	4	5
15. 私は知らない人とでも平気で話ができる	5	4	3	2	1
16. 私は人前で話すのは気が引ける	1	2	3	4	5

表2 有資格者と実習前後のシャイネス尺度とKiSS-18の平均点の比較と相関関係

	シャイネス尺度	KiSS-18	相関係数
有資格者	46.47 ± 9.73	58.28 ± 7.98	− 0.27*
学生（実習前）	48.32 ± 8.73	57.03 ± 9.27	− 0.66**
学生（実習後）	52.68 ± 5.93	55.80 ± 7.69	− 0.22*

**p<0.01 *p<0.05 最高得点 シャイネス尺度：80点 KiSS-18：90点

と学生の実習前後のシャイネス尺度とKiSS-18の比較は対応のないt検定、学生の実習前後のシャイネスと社会的スキルの比較は対応のあるt検定を行った。なお、有意水準は5%未満とした。

III. 結 果

有資格者および学生に配布した質問紙はすべて回収され、欠損値および無効回答はなかった。シャイネス尺度の平均点は有資格者46.47 ± 9.73点、学生実習前48.32 ± 8.73点、実習後は52.68 ± 5.93点であり、有資格者と実習前・実習後を比較して、実習後有意に高まった。KiSS-18の平均点は有資格者58.28 ± 7.98点、実習前が57.03 ± 9.27点、実習後が55.80 ± 7.69点であり、すべてにおいて有意差は認められなかった。シャイネス尺

度とKiSS-18との関連は、実習前後ともに有意な負の相関が認められ、実習前が $r = -0.66$ 、実習後が $r = -0.22$ であった。有資格者ではシャイネス尺度の平均は46.47 ± 9.73点、KiSS-18の平均は58.28 ± 7.98点であり、その相関係数は $r = -0.27$ であった（表2）。

IV. 考 察

今回、学生に対して3週間の実習前後にシャイネス尺度とKiSS-18について調査を行い、また有資格者に対しても同様の調査を行った。その結果、学生の実習前後および有資格者でシャイネス尺度とKiSS-18の間に有意な負の相関が認められた。ただし、その相関係数から関係の強さを判断すると、有資格者と比較して学生（実習前）が強い。なお、学生の尺度間の関係は、実習後に

有資格者と同程度に弱まった。対人関係を円滑に運ぶためには、状況に合せて積極的に関係を築いていくことが必要になってくる。日向野は、シャイネス傾向が強い個人は対人場面での自己主張に乏しいため、活躍の舞台や親和的な人間関係を獲得しにくく、「学校」「恋愛」「就職」「結婚」など様々な社会的立場において不利な立場に立たされやすいことが報告している⁷⁾。松島はシャイネス感情と社会的スキルの関係を特性シャイネス尺度とKiSS-18を用いて調査した結果、有意な負の相関が認められたことを報告しており⁸⁾、今回の結果からもシャイネス尺度が高い学生は社会的スキルが低いという関係が示され、先行研究を追認する結果となった。

また、有資格者では、PTとして多くの患者や家族に治療の目的や内容を説明したり、主治医や看護師とともに、リハビリテーション科において治療方針や予後などを検討する必要がある、職場において良好な対人関係が求められる。相川は、シャイネス傾向が強い人に自己表現スキルと会話維持スキルなどの社会的スキルを訓練すると、シャイネス尺度の得点が上昇することを見出しており⁹⁾、シャイネス傾向が強いPTやOTであっても、職場で求められる様々な業務において、社会的スキル向上のための訓練の場になっており、そこで獲得されたスキルは毎日の業務遂行によって維持・向上しているのではないかと考える。すなわち、シャイネス傾向が強いPT・OTでも職業を通して、シャイネス感情が克服され、社会的スキルが高まっていくことが推察された。一方、学生は、学内での対人関係において社会的責任を負う場面は少なく、仲の良い友人と過ごすことが多いため、社会的スキルが向上する環境に置かれていない。有資格者と学生が置かれている環境の違いが測定結果のひとつの要因として推測される。

学生のシャイネス尺度は、有資格者および実習前と比較して実習後有意に高まり、KiSS-18に有意差は認められなかった。シャイネス尺度が有意に高くなった要因のひとつとして、学内における学習環境が考えられる。評価測定技術や理学療法技術などの実技練習は、知人同士でオリエンテーションや技術を学び、疑問に思ったことは日頃から接している教員に質問するため、シャイネス感情が影響することが少ない。しかし今回の実習が初めてである学生は、実習施設における指導者をはじめ、患者やその家族、また医師や看護師など多くの人間関係を新たに築くスキルが求められる。また実習は各施設に1人配置されることが多く、実習に慣れるまで孤独感を体験することになる。後藤⁹⁾によるとシャイネス感情は、孤独感や抑うつなどと同様、

対人的不適応に関わる概念とされることから、今回、初めて実習を経験した学生は、知らない土地や環境において、指導者や病院スタッフ、対象者との人間関係構築において、もともとシャイネス感情が高い学生では、3週間の実習では克服されないまま実習が終了し、また患者や指導者との関わりの中で、自分の意見を積極的に表出できなかったことが、実習後にシャイネス尺度が有意に高くなったものと推察される。

一方、KiSS-18は実習前後でその点数に有意差は認められなかった。安部ら¹⁰⁾によると、作業療法学科学生35名(男性5名、女性30名、平均年齢23.9±5.56歳)では3週間の評価実習前後のKiSS-18の点数に有意差はなく、社会的スキルの向上は認められなかったと報告している。後藤ら¹¹⁾は、社会的スキルは対人関係の未熟さの学習や訓練によって改善・修正できると述べており、学生において、本研究でのシャイネス尺度が実習後に有意に高くなったことは対人関係の構築が困難であったことを意味しており、また3週間の実習では対象者の評価測定とレポートに追われ、対人スキルが獲得できる期間ではなかったと考えられ、実習後の社会的スキルに有意差を認めなかった要因と思われる。しかし、シャイネス尺度とKiSS-18では有意な負の相関関係であるが、相関係数は-0.22と非常に弱い関係であり、実習後にシャイネス尺度が有意に高くなったにも関わらずKiSS-18に変化がなかったことからの結果だと考える。

本研究では、シャイネス感情と社会的スキルは学生と有資格者ともに有意な相関が認められた。また学生では実習後に、シャイネス尺度が有意に高まったが、社会的スキルに有意な変化は認められなかった。実習を経験することで期待される社会的スキルの向上が認められなかった原因のひとつにシャイネス感情の高まりにより対人関係の構築に影響を及ぼすものと考えられるため、学内教育においても、対人スキルの向上を目的とした教育内容の充実を図ることが重要であると考えられる。

引用文献

- 1) 渡辺京子: 医療現場における対応. PTジャーナル, 2004, 38(2): 142-149.
- 2) 相川 充: 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討. 社会心理学研究, 1999, 14(2): 95-105.
- 3) 勅使河原麻衣: 学外実習における不合格原因の検討. リハビリテーション教育研究, 2008, 13: 76-79.
- 4) 菅原健介: シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極的傾向. 性格心理学研究, 1998, 7(1): 22-32.

- 5) 堀 弘道, 山本真理子: 心理測定尺度集I—人間の内面を探る<自己・個人の内過程>. サイエンス社, 東京, 2001, p226.
- 6) 堀 弘道, 山本真理子: 心理測定尺度集I—人間の内面を探る<自己・個人の内過程>. サイエンス社, 東京, 2001, p171.
- 7) 日向野智子: 対人苦手意識と社会的スキルとの関連. 日本パーソナリティー心理学会大会発論文集, 2006, pp158-159.
- 8) 松島るみ: シャイネスが自己開示に及ぼす影響—社会的スキルを媒体として—. 日本教育心理学会総会発表集, 1990, 41: 357.
- 9) 後藤 学, 大坊郁夫: 大学生はどんな対人場面を苦手とし, 得意とするのか?—コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連—. 対人社会心理学研究, 2003, 3: 57-63.
- 10) 安部征哉, 元村直靖: 作業療法学生の実習における社会スキルについての検討. 大阪教育大学紀要, 2008, 57(1): 41-47.
- 11) 後藤 学: シャイネスに関する社会心理学的研究とその展望. 対人社会心理学研究, 2001, 1: 81-92.